

“A Little Cloud” 論－憂愁という名の牢獄

木村英紀

要約

“A Little Cloud” は、*Dubliners* 15篇の中で14番目に書かれた作品であり、これまでさまざまな論じられてきた。しかし、*Dubliners*の他の作品同様に、読みの可能性は際限なく広がっている。そこにはすぐれた芸術作品が持つambiguityがあり、同時にそれはJames Joyceの作家的方法論とも言うべきものだからである。また、この作品については、Joyce自身が、「“A Little Cloud”の1頁はこれまで書いた詩を全部合わせたよりも私に喜びを与えてくれる」と弟への手紙に書いている。しかし、その理由は示されていない。

本稿では、登場人物の心理や人物像の分析というオーソドックスな手法を取りつつ、伝記的事実からの推測も交えて、その理由を探ってみた。その過程が、この作品の解釈に異なった側面からの光を当てることができたように思われる。

キーワード：脱出、melancholy、vulgarity、prisoner、exile、結婚、戯画

1. はじめに

James Joyceは、弟のStanislausへの手紙の中で、“a page of *A Little Cloud* gives me more pleasure than all my verses”と書いている（1906年10月18日付、“The Evidence of the Letters” 278）。ここでいう、“all my verses”とは、そのほとんどが翌年に出版された詩集*Chamber Music*に収められた詩であろう。その詩の全てよりも深い喜びを与えてくれる作品とはどういうことなのか。この作品は、*Dubliners* 15篇中14番目のもので“The Dead”の直前に書かれたものである。この短編集が一つの大きなテーマの下に1904年から書き始められており、また後に*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916)の下敷きとなる“A Portrait of the Artist”を同時に書いていたことを考えると、この頃のJoyceには小説家としての技法と方法論の土台がほぼ確立していたと考えることも可能かもしれない。小説の原稿が出版される目途は全くたっていなかったものの（*Dubliners*中の3作は1904年に*The Irish Homestead*に掲載されたが）、この作品によって作家としての意図が芸術的に達成されたという満足感を感じていたのかもしれない。しかしながら、これはあくまでも推測に過ぎない。Joyceは上に引用した以外のことは手紙に一行も書いていないからである。つまり、なぜ喜びを感じているのかという理由には読者には謎のままである。*Dubliners*については数多くの批評が書かれてきたし、この作品を単独に取り上げた論文も多数存在するが、この点を明らかにしたものは皆無に近い。

本稿は、この作品に登場するChandlerとGallagherの二人の人物像と関係性、及びChandlerと妻の関係、彼の家庭の問題を詳細に分析する中から、この問いに答えようとする試みである。それが、この作品の解釈に多少なりとも新しい光を投げかけることになるかもしれないからである。

2. Gallagherとは何者か？

この作品の登場人物はきわめて少ない。主人公のThomas Chandlerとその友人であるIgnatius

Gallaher、そしてChandlerの妻のAnnie及び二人の間にできた赤ん坊だけである。その中でも中心となるのがChandlerとGallaherの二人である。したがって、この作品の分析の中心となるのも当然この二人の人物とその関係、及びChandlerの家庭生活ということになる。

そこで、我々はまずGallaherの人物像の分析から始めることにする。まず、作品の冒頭の段落でGallaherは次のように紹介される。

Eight years before he had seen his friend off at the North Wall and wished him godspeed. Gallaher had got on. You could tell that at once by his travelled air, his well-cut tweed suit, and fearless accent. Few fellows had talents like his and fewer still could remain unspoiled by such success. Gallaher's heart was in the right place and he had deserved to win. It was something to have a friend like that.¹

この段落では、“he”が何者かは明示されないが、次の段落でそれがChandlerであることが明らかにされる。そこで、読者は、この段落全体が語り手による客観的描写ではなく、Chandlerの心の中で考えたことを表現する描出話法であることを知る。したがって、ここで描かれているGallaher像はあくまでもChandlerの心の中に結ばれた像であって、実際の人物像とはかなり異なるのではないかという疑問を、物語が展開するにつれて読者は抱くに至る。同時に、この最大級の賛辞で彩られた人物像の中に、ChandlerのGallaherに対する期待の大きさを見ることにもなる。

実際、8年ぶりにこの旧友と再会するために高級な酒場に向かうChandlerの心象風景の中に、彼の期待の大きさが誇張とも言えるほどに描かれることになる。その典型的な例を引用してみよう。“Little Chandler quickened his pace. For the first time in his life he felt himself superior to the people he passed. For the first time his soul revolted against the dull inelegance of Capel Street.” (73) 32歳になる、ダブリン法学会の書記である男が思うに於ては、あまりに大げさな感情ではないだろうか。先の引用にあるように、「そのような男が友だちであることは大したことなのだ。」と考えているにしても、ロンドンで新聞記者として成功した友人との再会に掛ける期待としては少々大げさすぎる心情であろう。とは言え、Chandlerがこのような心情になる要因は他にもあるので、この問題は後に改めて検討することにする。

さて、待ち合わせの場所であるコーレスの店で二人は再会することになるが、その場面はまさに冒頭の段落で描かれたGallaher像が崩れていく過程である。批評家の中には、“this tale of homosocial jousting for prestige and metaphysical mastery” (Norris 109)と見る者もいるが、そのような「読み」は、この再会の場面を見れば、的外れであることが分かる。ここで描かれているのが決して「威信や形而上的な優劣をかけた男同士の戦い」ではないことは、すぐに見てとれるからである。

一読して気が付くのは、あまりにナイーブなChandlerと、成功した帰郷者として尊大な態度を取るGallaherとの対比である。典型的な会話を見てみよう。Gallaherに“Have you never been anywhere, even for a trip?”とからかうように問われた時、Chandlerは“I’ve been to the Isle of Man.”と答える。マン島のような近場ではどこにも行ったことにはならないという意味を込めて、Gallaherは笑いながら、“The Isle of Man! Go to London or Paris: Paris, for choice. That’d do you good.”と言う(76)。そして、彼はChandlerにパリの「魅力」を詳しく語って聞かせる。それに対しては、“—Then it is an immoral city, said Chandler, with timid insistence—I mean, compared with London or Dublin?” (77)という言葉が出るが、それとて、Gallaherの、ロンドンもベルリンも同じく墮落しているのだという「説明」にかき消されてしまう。つまり、Gallaherにとっては、上流階級

や修道院などの道徳的腐敗は、言わば常識であり、かつ自らもその腐敗の一部となっていることが明らかになるのである。ここに、新聞記者としてヨーロッパのさまざまな所に行った経験を持つ人間が、ダブリンを離れたことがない者に対する傲りを見るのはたやすいことである。

また、語り手によるGallaherの形容は、Chandlerとは対照的にその男性的な性格を強調するものになっている。Chandlerを待っているGallaherは、足を広げて酒場のカウンターに背を凭せかけ、モルトウィスキーを生で飲んでいる姿として描かれている。そして、いかにもこのような高級な酒場に相応しい飲み方をし、言葉遣いも俗語や決まり文句 (cliché) を多用し、挙げ句は新聞業界を知らない友人に向かって業界用語すら用いる。また、Chandlerが「微笑む」のに対し彼は「笑う」。決定的なのは、Gallaherは“Ignatius Gallaher”と常にフルネームで呼ばれるのに対して、Chandlerはあだ名の“Little Chandler”である。ここには、明確に語り手の読者に対するメッセージが表れているようである。すなわち、勝者はGallaherで、Chandlerはあくまでも敗者だということである。しかし、もう少し深く読み込むと、それは表面的な読みかもしれないという疑問が出てくる。

一つは、かなり早い段階で、Gallaherに対して幻滅を感じているChandlerの心理が描かれていることである。

[Little Chandler] was beginning to feel somewhat disillusioned. Gallaher's accent and way of expressing himself did not please him. There was something *vulgar* in his friend which he had not observed before. (76-77: emphasis mine)

Stanislaus Joyceの *My Brother's Keeper* によれば、Joyceは“vulgarity”を何よりも軽蔑していたという (195-96)。そうだとすれば、vulgarityを体現した人物であるGallaherを理想的存在として描いているわけではないことになる。むしろ、帝国の首都の新聞記者であるGallaherを“vulgar”な形で描くことによって、ダブリンから脱出して「成功」してはいるが、所詮は墮落した俗物にすぎないと批判的に眺めていると言えるのではないだろうか。

Gallaherの墮落は、結婚が話題になると、より鮮明な形で表現される。これは、Gallaherが“in a calm historian tone” (78) でイギリスを含めたヨーロッパの道徳的 (性的) 腐敗を一頻り解説して見せた後に、個人的な話題に戻そうとして次のように始められる。

—But tell me something about yourself. Hogan told me you had...tasted the joys of connubial bliss. Two years ago, wasn't it?
 Little Chandler blushed and smiled.
 —Yes, he said. I was married last May twelve months.
 —I hope it's not too late in the day to offer my best wishes, said Ignatius Gallaher. I didn't know your address or I'd have done so at the time. (78-79)

“you had...tasted the joys of connubial bliss” とは大仰な表現であり、誠実さは微塵も感じられない。しかも共通の友人関係を辿ればGallaherがChandlerの住所を知ることなど簡単なことだったはずである。また、この後の部分で、Gallaherが子どもはできたかと問い、Chandlerが男の子が一人だと答えると、Gallaherは「音が出るほどChandlerの背中を叩いて」、「でかした、さすがだよ」と言う。この言葉を聞いたChandlerの心情は次のように表現される。“Little Chandler smiled, looked confusedly at his glass and bit his lower lip with three childishly white front teeth.” (79) この照れ笑い

と当惑と悔しさが交錯した表情はなぜなのか。この問いに対する答については後述することにして、ここではこのような思いを抱いたChandlerが、前述した、Gallaherに対する幻滅と相俟って攻撃的になる場面を見ることにする。

広くヨーロッパを見て回り、そこから得た知識と経験を自らの力の源としているGallaherに対してChandlerが「優位」に立てる点、すなわちGallaherが経験していないことで彼だけが経験していることは、すでに結婚して家庭を持っていることだけである。それで、彼はGallaherに対して、彼もまたすぐに結婚して束縛される生活を送ることになるのだと、「余裕」を見せながら、同時に執拗さをもって語る。その真意を見抜いてか、Gallaherは真剣な目つきでChandlerを見つめる。少々長いが、この二人の再会の場面のハイライトシーンとも言うべきものなので引用してみよう。

—Some day you will[put your head in the sack], said Little Chandler calmly.

Ignatius Gallaher turned his orange tie and slate-blue eyes full upon his friend.

—You think so? he said.

—You'll put your head in the sack, repeated Little Chandler *stoutly*, like everyone else if you can find the girl.

He had slightly emphasised his tone and he was aware that *he had betrayed himself*: but, though the colour had heightened in his cheek, he did not flinch from his friend's gaze. Ignatius Gallaher watched him for a few moments and then said:

—If ever it occurs, you may bet your bottom dollar there'll be no mooning and spooning about it. I mean to marry money. She'll have a good fat account at the bank or she won't do for me.

Little Chandler shook his head.

—Why, man alive, said Ignatius Gallaher, vehemently, do you know what it is? I've only to say the word and to-morrow I can have the woman and the cash.... When I go about a thing I mean business, I tell you. You just wait. (81: emphases mine)

結婚をめぐってChandlerとGallaherの両者が激していることはすぐに見て取れるが、それだけではない。まずChandlerの方を見ると、Gallaherが使った“put one's head in the sack”（「袋の中に頭を突っ込む」＝窮屈な結婚生活に入る）という俗語表現をそのまま用いることによって、しかもそれを「少し語調を強めて言う」ことによって、自らの結婚生活が束縛された自由のないものであることを自ら認める結果となり、しかもそのことに自分でも気が付くということになってしまったのである。一方、Gallaherの方は、Chandlerにしては珍しく執拗に「君も他の人間と同じように窮屈な結婚をすることになるのだ」と繰り返すのに対して、「愛情ではなく金と結婚するのだ」とやり込めたつもりになっているが、しかしそのことによって、現在の自分が男娼的な存在に成り下がっていることを端なくも暴露する結果となったのである。² このことにChandlerはおそらく気付かなかっただろうが、しかし、Gallaherと自分との間に友情が存在しないことには、この場面の直前に気が付いている。そのことは、描出話法によって次のように表現されている。“Gallaher was only patronizing him by his friendliness just as he was patronizing Ireland by his visit.” (80) ここで注目しなければならないのは、“friendship”ではなく、“friendliness”と言っていることである。二人の間にもはや「友情」など存在しないとChandlerは悟らざるをえないのだが、上の引用に見られるように、そのことが彼を攻撃的にしたのである。

二人が別れる際に、Gallaherはウイスキーの味見にこと寄せて、“Must get a bit stale, I should think” (82) と「君の結婚生活はさぞや気の抜けたものだろう」という皮肉を言い、それはあた

かも彼の勝利宣言のような印象を与える。³しかし、上述の点を考えると、Joyceはダブリンを脱出して成功したアイルランド人の理想像としてGallagherを造形しているわけではないと言えるのである。

3. Chandlerの憂愁と夢想

では、主人公のChandlerとはどのような存在なのか。一読した読者の多くが抱くような、「自らの人生に負けた、情けない敗北者」なのだろうか。

確かに、冒頭でChandlerは次のように描かれる。

He was called Little Chandler because, though he was but slightly under average stature, he gave one the idea of being a little man. His hands were white and small, his frame was fragile, his voice was quiet and his manners were refined. He took the greatest care of his fair silken hair and moustache and used perfume discreetly on his handkerchief. The half-moons of his nails were perfect and when he smiled you caught a glimpse of a row of childish white teeth. (70)

Gallagherと対比させて見ると、語り手はきわめて意図的にChandlerを矮小な存在として描いている。したがって、Margot Norrisの、“The narrator of the story, I have been suggesting, is in one respect a double of Gallagher, a voice of belittlement and disparagement that colors our reading and interpretation of a story about a man’s internalization of the belittlement and disparagement to which he is subjected on one evening.”という指摘は当を得ている(120)。しかし、それだけではない。その点をこれから見ていくことにする。

まず、Chandlerが自己の性格として規定するmelancholyについて見てみよう(“Melancholy was the dominant tone of his temperament, he thought, but it was a melancholy tempered by recurrences of faith and resignation and simple joy.”(73))。それは、言い換えると、「悲しみ」ということになろうか。彼は、法学会の職場から見える晩秋の公園を見てこう思う。“He watched the scene and thought of life; and (as always happened when he thought of life) he became sad.”(71)しかし、Chandlerは悲しみを感じはするが、本気で苦悶して悩んでいるわけでもない。Chandlerは、語り手が描いている限りでは詩人になるための努力をしていない。独身時代に買い求めた詩集も、恥ずかしさから妻に読み聞かせることもなく、空しく本棚に置かれたままである。我々が聞かされるのは、時折、詩興が湧いてくるという程度のものであることからすると、Chandlerは努力を放棄しているときさえ言える。前の引用の直後にはこう書かれている。“A gentle melancholy took possession of him. He felt how useless it was to struggle against fortune, this being the burden of wisdom which the ages had bequeathed to him.”(71)この部分の中でも、特に“the burden of wisdom”という表現は、Chandlerの人生に対する姿勢への痛烈なアイロニーである。

こうしてみると、Chandlerにとってのmelancholyとは、自らの生を憐れに思う心情であるが、さりとて彼には人生を変えようとする意志と覚悟は見られず、自らの生の現実を「運命」だと感じる諦念しか持ち得ないのである。そこには、自己憐憫はあっても、他者への真摯な同情心や他者を思いやる心はない。例えば、彼はGallagherと待ち合わせている店に向かう途中で、貧しい通りで遊んでいる子どもたちを見るが、その場面は次のように描かれている。“A horde of grimy children populated the street. They stood or ran in the roadway or crawled up the steps before the gaping doors or squatted like mice upon the thresholds. Little Chandler gave them no thought.”(71)またそれは、Gallagherとの会話の中で出てくる、落ちぶれた友人への無関心な態度にも表れている(75-76)。

この最も劇的な場面が、妻のAnnieが買い物に出かけたときにまだ1歳にもならない我が子のお守りをしている場面であろう。ChandlerはByronの詩集を開いて、“How melancholy it was! Could he, too, write like that, express the melancholy of his soul in verse?” (84) と思うのだが、その途端に赤ん坊が泣き始め、彼にはどうすることもできない。それどころか、我が子に対して怒りを感じ、怒鳴ってしまうのである。Chandler流のmelancholyが最も典型的に表れた場面である。

このmelancholyと固く結びついているのが、夢想である。物語の展開の中では、Chandlerは8年ぶりにロンドンで活躍しているGallaherと再会する喜びから、次第に興奮の度合いを強めていく。彼にとっては、「ロンドン」と「成功した新聞記者」という2つが夢想の契機となっていく。前述のように、Chandlerは、ダブリン法学会の書記という安定した職についており、およそ1年半前に結婚し子どももいる。こうした点では、彼は裕福とは言えないもののrespectableな中産階級に属している。しかし、彼は仕事に満足しておらず(“his tiresome writing” (71))、いつかは詩人として世に出たいと心の奥底で願っている。この密かな願望が、ロンドンで成功したジャーナリストである旧友との再会に対する期待感から、意識の表面に浮上してくるのである。

Chandlerは仕事を終えて、約束の店に向かう途中のGrattan橋から見た光景に詩興を感じ、詩を書いてみたいと強く思う。その心情は、描出話法を用いて次のように描かれる。

He wondered whether he could write a poem to express his idea. Perhaps Gallaher might be able to get it into some London paper for him. Could he write something original? He was not sure what idea he wished to express but the thought that a poetic moment had touched him took life within him like an infant hope. He stepped onward bravely.

Every step brought him nearer to London, farther from his own sober inartistic life. A light began to tremble on the horizon of his mind. (73)

この引用部分でも特に、「何を表現したいのかは不確かであったが、それでも自分の中に詩興が湧き出てきたという思いは、幼い希望のように生き生きと躍動するのであった。彼は胸を張って足を踏み出した。」という箇所は、きわめて喜劇的である。⁴

すでに述べたように、語り手は、彼がこれまでどのような詩を書いたのか、あるいは書いているのかを全く伝えていないため、読者には彼の詩人としての力量も分からないのだが、この部分を読むと、Chandlerに詩人としての才能があるとはとても思えない。また、この時代でもすでにかなり古めかしいものと考えられていたであろうByronの感傷的な詩(“On the Death of a Young Lady”)を読んで感動するChandlerの姿からも、そのことが分かる。⁵したがって、自分が詩集を出せば、ロンドンの詩壇でケルト派の詩人として認められるだろうと、批評家から寄せられるであろう批評文を想像したり、自らの名前をよりアイルランド的にみせた方がいいなどと考える場面は、滑稽ですらある。それは描出話法の形で次のように表現されている。

The English critics, perhaps, would recognise him as one of the Celtic school by reason of the melancholy tone of his poems; besides that, he would put in allusion. He began to invent sentences and phrases from the notices which his book would get. *Mr Chandler has the gift of easy and graceful verse.... A wistful sadness pervades these poems.... The Celtic note.* It was a pity that his name was not more Irish-looking. Perhaps it would be better to insert his mother's name before the surname: Thomas Malone Chandler, or better still: T. Malone Chandler. He would speak to Gallaher about it. (74)

そして、この引用の直後の、「夢想 (“revery”) に耽るあまりに、彼は目的の通りを行き過ぎてしまい、引き返さなければならなかった。」(74) という件は、全体としては暗い色調のこの作品において、喜劇的側面が頂点に達した部分である。(無論、この部分は、Joyceが学生時代から批判してきたアイルランド文芸復興運動への嘲笑が重ね合わせられた部分でもあろう。)

このように、Chandlerの夢想はきわめて喜劇的に描かれているのだが、上の2箇所引用に出てくるように、Chandlerは自らの願望を叶えるためにGallagherの助力を当てにしているという点も見逃すことができない。そして、これこそが、前に答を留保していた、ChandlerのGallagherとの再会に掛ける期待の大きさのもう一つの要因であると言えよう。前の章で見たように、結局彼はGallagherにそのことを一言も言い出せずに終わるのだが、他者への依頼心の強さという点には注目しておく必要がある。その点も、ChandlerとGallagherの両者の対比が強くて出ている所だからである。Gallagherのアイルランド脱出には何か後ろ暗い面がある (“[Gallagher] had got mixed up in some shady affair, some money transaction” (72)) という噂があったにしろ、彼が自力で脱出したことは事実だからである。結局、“Eveline”の主人公の場合と同じように、自らの力で脱出しようとする者には願望を叶えることができないのである。⁶

したがって、Gallagherとの再会の場面の後半で、Chandlerは本来ならば自分の方が優れているはずだと思っても、結局は自分の性格的欠陥のために、脱出もできなければ友人のように成功もできないのだと悟る。そして、次のように思う。“What was it that stood in his way? His unfortunate timidity! He wished to vindicate himself in some way, to assert his manhood.” (80) この部分がChandlerの本質の顕現 (“epiphany”) であるとすれば、ここを作品のendingにしてもよかったのかもしれないが、作者はそうはしなかった。⁷ それは、Chandlerの本質的欠陥が「臆病さ」だけではないということになるのであろう。

とすれば、我々はGallagherと別れて帰宅してからのChandlerをも詳細に見ていく必要がある。

4. 「牢獄」としての家庭？

この16ページの短篇の最後の約4ページがChandlerが帰宅してからのシーンに当てられている。ここで読者は、Gallagherに「気の抜けた結婚生活」と皮肉られたChandlerの家庭を覗き見ることになる。しかし、不可思議なのは、あれほど酒場での再会のシーンでGallagherの品の無さと傲慢さを見せつけられ、彼に頼ってダブリンを脱出したいという願望もまた潰えたにもかかわらず、ChandlerはなおもGallagherと再会した興奮を引きずっていることである。これはなぜなのか。

彼は諦めきれないのだ。先の引用のように、まさに「どうかして名を上げ、男を上げたい」のだ。Gallagherに侮られたまま引き下がれない悔しさがあったのである。だからこそ、Gallagherの言葉を意識しながら、居間に置かれた妻のAnnieの写真を見ずにはいられないのである。

The composure of the eyes [of Annie] irritated him. They repelled him and defied him: there was no passion in them, no rapture. He thought of what Gallagher had said about rich Jewesses. Those dark Oriental eyes, he thought, how full they are of passion, of voluptuous longing! ... Why had he married the eyes in the photograph? (83)

しかし、次の瞬間にはこのような考えに脅えたかのように、自分を抑えようとする。“He caught himself up at the question and glanced nervously round the room.” (83) 部屋を見回すと、しかし、置かれている家具に目が行き、そこに「卑しさ」 (“something mean”) を感じる。それは彼の中に「怒り」を引き起こし、何とかここから抜け出せないものかと考えるが、次の瞬間には、家具の

分割払いの支払いがまだ残っていると思う。このように、この場面では、Chandlerの心は振り子のように、家庭からの脱出願望とそこから抜け出せない無力感との間で目まぐるしく揺れ動くのである。

A dull resentment against his life awoke within him. Could he not escape from his little house? Was it too late for him to try to live bravely like Gallaher? Could he go to London? There was the furniture still to be paid for. If he could only write a book and get it published, that might open the way for him. (83)

前章で詳しく見たように、8年振りに再会したGallaherの低俗さや傲慢な態度に嫌気が差し、Chandlerは詩人になるという夢が全く現実性を欠いたものだと思い知らされたはずなのに、Gallaherと別れてからもこのように考えるとはどういうことなのか。Gallaherとの再会が契機となって常軌を逸した心理状態になっているのか。それとも以前から家庭生活に不満があったということなのだろうか。ここでは結論を急がずに、もう少し先の展開を見てみよう。

上述の場面は、ChandlerがAnnieに頼まれていたコーヒーを買ってくるのを忘れたために、彼女が紅茶と砂糖を買いに出かけた時に眠っている赤ん坊をその腕の中に預けられて、彼が思いを巡らす場面である。その後が続くのが、前述した、Byronの詩を読む場面であるが、ここで一つの「事件」が起こる。赤ん坊が目目を覚まして泣き始めるのである。詩を読んで感慨に耽っていたChandlerは、それを妨げられて絶望と怒りの頂点に達する。

It was useless. He couldn't read. He couldn't do anything. The wailing of the child pierced the drum of his ear. It was useless, useless! He was *a prisoner for life*. His arms trembled with anger and suddenly bending to the child's face he shouted:

—Stop! (84: emphasis mine)

「終身刑の囚人」とは大仰な表現であるが、そこにはChandlerの家庭生活に対する鬱積した不満があると見なければならぬのであろうし、それは妻のAnnieとの関係に起因するのであろう。語り手は、その関係について多くを語っていないので、読者は想像で補うしかないのだが、鍵を示唆する部分はある。

一つは、上の引用の後でのAnnieが買い物から帰って来てからの態度である。彼女は引きつけを起こしたように泣いている赤ん坊を見ると、「どうしたの、どうしたのと叫ぶ」。そして買い物包みを投げ出して、Chandlerから泣いている我が子を奪うようにして取り上げ、「この子に一体何をしたのと叫びながら、彼の顔を睨みつけ」るのである。Chandlerは、妻の剣幕に対応することができない。それどころか、次のように描かれるのである。“Little Chandler sustained for one moment the gaze of her eyes and his heart closed together as he met the hatred in them.” (85) Annieは夫のことを無視して、ひたすら赤ん坊をあやし続ける。

二つ目は、帰宅直後のことであるが、Chandlerがコーヒーを買い忘れたことに腹を立て、素っ気ない返事しかしない、という部分である (“Of course she was in a bad humour and gave him short answers.” (82))。そして、自分で買いに行くと言って子どもを預ける時の言葉は、“Here. Don't waken him.” だけである (82)。

さらに、作品の始めの辺りに、独身時代に買った詩集を取り出して妻に読んで聞かせようという気持ちに駆られることがあったが、「恥ずかしさのためにいつも思いとどまるのだった」とい

う箇所（71）からは、Chandlerの小心さだけが原因ではないことが窺われる。

こうしてみると、Chandlerの家庭の問題とは夫と妻の力関係の問題である。Dublinersに描かれるさまざまな男性像の中でも、Chandlerは、“The Boarding House”のBob Doranに最も近い人物で、“Eveline”に登場する暴力的な父親や“Counterparts”のFarringtonなどとは対照的な人間である。この作品が書かれた時代のアイルランドでは家父長的家族形態の中で夫が支配的な場合が多かったのだが、その意味ではChandlerは例外的な夫であると言えるかもしれない。彼は給料運搬人のような存在で、自分の家庭の中に居場所がないという印象を受ける。Margot Norrisは、“The curious tension in the narration of the final scene is raised by the discrepancy between the realistic representations of an attractive, well-run home and family life, and the cynical and disaffected shadow or cloud cast on it by Chandler’s eyes as they are newly infected by Gallaher’s libertine filter.”（118）と述べているが、Annieが「きちんと家庭を守っている」としても、Chandlerにしてみれば、その家庭は決して“attractive”なものではなく、それは突然に現れたGallaherの一時的な影響とは言えないはずである。Annieが自分の趣味にあった家具を買い、子どもを生み育て、家庭という巢作りに励んでいることは分かるにしても、夫を尊敬し励ますという存在ではない。むしろ、母—子という強力な韌帯によって夫が疎外されているような家庭であり、二人の間には現在も愛情があるのかさえ疑わしいと言わざるを得ないし、精神的な絆があるとも考えにくい。

したがって、この作品の批評の中でさまざまに解釈が分かれる結末の部分についても、上述のような家庭の問題が大きく関わっていると考えるべきであろう。“Little Chandler felt his cheeks suffused with shame and he stood back out of the lamplight. He listened while the paroxysm of the child’s sobbing grew less and less; and tears of remorse started to his eyes.”（85）という結末において、特に“shame”と“tears of remorse”に関しては批評家によって大きく見解が分かれるが、ここで言う“shame”とは、「恥」というよりはむしろ「屈辱」だと捉えた方が自然であるように思われる。この当時のアイルランドの家父長的な家族形態を考えると、彼がうまく赤ん坊をあやすことができなかったことを恥だと思っているとは考えにくいからである。むしろ、自分が家の中で当然占めるべき地位を妻が認めないことに対して強い苛立ちを感じていると考えるべきであろう。同時に、コーレスの店でChandlerが見せたプライドの高さも想起すべきであろう。

[Little Chandler] felt acutely the contrast between his own life and his friend’s, and it seemed to him *unjust*. Gallaher was his inferior in birth and education. He was sure that he could do something better than his friend had ever done, or could ever do, something higher than mere tawdry journalism if he only got the chance. (80: emphasis mine)

Gallaherに対してこのように感じたとするれば、当時の社会通念の中で生きていたであろうChandlerが、自分を見下す妻に対してはこれ以上に「不当だ」と感じたと考えるのが自然な読み方ではなからうか。

また、この自負心（それに根拠があるかどうかは別問題であるが）と現実との落差が“tears of remorse”をもたらしたとも言える。この「後悔の涙」は、Earl G. Ingersollが言うように、「変革をもたらすような認識に導く可能性がありそうもない涙であるため、最も不毛で無駄な涙である」（124）ことは確かである。しかし、Chandlerは何を後悔しているのだろうか。何人かの批評家が言うように、詩人になりたいという夢に耽溺したことに対する後悔であろうか。おそらく、それは違う。Chandlerから夢を取り去ることは彼の最後の拠り所である「プライド」を取り去ることだからである。彼は夢の中で生きていくしかないのである。とすれば、Annieとの結婚

生活に対する後悔であろうか。それは、これまで論じてきたことから明らかなことである。だが、窮極的には、自らが望む道に進めないという空虚で「不当な」生活、あるいは「終身刑の囚人」のような生活に対する後悔というべきであろう。そして、ひたすら自分を憐れむ涙がこぼれ落ちてくるのだが、それは、前述したような、Chandler流の“melancholy”である自己憐憫の涙に他ならない。彼は、自分の家庭が牢獄なのではなく、自らの精神世界こそが牢獄であることに気が付かない。そうであればこそ、Chandler自らが精神世界の中心であると考えている“melancholy”という名の牢獄の中で涙するしかなく、彼にはそこから抜け出す希望は残されていないのである。

5. JoyceとChandler—結論に代えて

この作品の解釈という点では、前章でこの小論は終わってもよいと思われる。では、何を付け加える必要があるのか。それは、この小論の冒頭で述べた、なぜJoyceがこの作品を気に入っていたのかという問いに対する答である。その答を求める過程が、ChandlerとGallagherという人物像に別の側面からの光を当てられるかもしれないからである。そのためには、きわめて断片的ではあるが、伝記的事実から推測せざるをえないであろう（無論、筆者に文学探偵を気取るつもりもなければその能力もないことは言うまでもない）。⁸

まず、簡単に伝記的事実を確認してみよう。Joyceは、この作品を1906年の前半には完成させて、7月に出版者のGrant Richardsに送っている。しかし、周知のように、*Dubliners* の出版交渉は困難を極め、Grant Richardsとはこの年に長く執拗な交渉が続き、ついに出版は拒絶されてしまうのである（最終的に“The Dead”を加えて*Dubliners*が出版されるのは、8年後の1914年6月である）。前年の7月27日には長男のGiorgioが生まれている。したがって、Joyceがこの作品を書いていた時点では、彼の子どもとChandlerの子どもは、ほぼ同じくらいの赤ん坊だった。この時はイタリアのトリエステ（当時はオーストリア・ハンガリー領）に移り住んでおり、長男誕生の3ヶ月後には弟のStanislausが来て同居し、Joyceの家族を経済的に支援していた。そして翌年5月、ついにJoyceの詩集*Chamber Music*がロンドンで出版されたが、この出版に対する彼の期待は大きなものであったと推測できる。

次に、Stanislausの証言を援用することにする。

[James Joyce] told me that often when he had no money and had had nothing to eat he used to walk about reciting to himself for consolation, like ‘Little Chandler’ in *Dubliners*, his own poems or others he knew by heart or things he happened to be writing then. (231-232)

これは、Joyceが医学を学ぶ目的で1902年11月から翌年4月までパリに滞在して、ボヘミアンたちと付き合ったり、図書館に通っていたりした時期のことを語った部分である。

このような断片的な伝記的事実に基づいて作品を解釈するのは危険なことではあるが、しかし少なくともここから分かるのは、Joyceは自ら創作したChandlerに対して、同情心とは言わないまでも、ある種の思い入れがあったのではないかということである。少なくとも、JoyceはChandlerの詩集を一冊出版しさえすればという心情に自らの思いを仮託したと言えるのではないだろうか。もちろん、そういう思いがあったにしても、作中人物としてのChandlerはJoyceの分身ではない。これまで見てきたように、Chandlerは、あくまでも詩人になることを夢見るだけの夢想家であり、現実には自分の夢に向かって冒険することができない人間である。その意味では、Joyceがこの短編集全体を通じて意図したように、「ダブリンの麻痺 (paralysis)」に囚われた存在でも

ある。小心なChandlerにとってはGallagherは仰ぎ見る山のような存在で、Chandlerはその周りを“a little cloud”のようにふわふわと漂い、ついには消え去る存在でしかない。⁹

当然のことながら、JoyceとChandlerは才能という点でも性格的にも全く異なる。Joyceが*Dubliners*の出版交渉の際に見せた、自らの芸術的信念に基づいた非妥協的な姿勢は、paralysisとは無縁である。また、Joyceと妻のNoraとの関係はChandlerとAnnieのそれとは全く異なり、非常に強い精神的絆で結ばれていた。あるいは、すでにイギリス詩壇において名声を勝ち得ていたW. B. YeatsやJohn M. Syngeなどの先輩詩人たちに対するJoyceの態度などは、まだ無名の文学志望の青年としてはきわめて大胆なものであった点も無視することができない。生活苦に喘ぎながら心血を注いで書き続けているという状況にあっても、こうした姿勢を保ち続けたということには驚嘆すべき剛胆さを感じないわけにはいかない。そして、この剛胆さはその一部を卑俗化した形でGallagherの造形に用いたとも言える。

先に見たように、Gallagherは新聞記者として活躍しているものの、大英帝国に取り込まれた存在であり、同時にvulgarな存在で男娼的ですからある。(Gallagherの、“There are hundreds—what am I saying?—thousands of rich Germans and Jews, rotten with money, they'd only be too glad.... You wait a while, my boy.” (81) とChandlerに語る言葉は、male chauvinistの言葉であると同時に、male prostituteの言葉でもある。) 他方で、Chandlerはダブリン (Gallagherの言葉で言えば、“old jog-along Dublin”) という辺境にいるために、道徳的墮落は免れてはいるものの、自ら作り出した「牢獄」の中でひたすら自分を憐れむだけである。このような逆説を背景として、Joyceは、対照的な二人の人物を中心に物語を構成し、かつ自らの心情の一部をそれぞれの人物造形に付与しながら、両者の人生がそれぞれに質的な違いはあっても、ともに不毛な戯画にすぎないものであることを指弾したと言える。トリエステでの貧窮生活に耐えながらも、祖国を捨てた人間 (exile) の透徹した眼と矜持があったればこそ、この不毛な対比を凝視できたと言えるのではないだろうか。¹⁰

さらに、結論的に言えば、Chandlerを敗北者として戯画的に描く「語り」には、Joyceのしたたかで周到な計算がみられる。読者を迷路のような読みの世界へと誘う語りである。そうした語りの中に、Joyceは自らの意識をも戯画化しているかのようである。前述のように、Joyceには自分こそ本物のexileであり、そのために本物の芸術精神を持っているのだという強い自負がある反面で、この作品を書いた時点では、まだ一冊の本も出版することができず、世に認められていないという鬱屈した感情があった。彼は、この一点を創造の源泉として拡大し、自らの意識をChandlerという戯画化された人物の中に投影したのであろう。そして、その戯画が徹底したものであり、同時にそれが芸術的に昇華されたものであればこそ、彼にはある種の自虐的な喜びと芸術的達成感という喜びの双方を感じることができたのではなかろうか。

註

1. James Joyce, *Dubliners: Text and Criticism*, Ed. Robert Scholes and A. Walton Litz (New York: Penguin, 1996) 70. 以下、本文中での*Dubliners*からの引用はこの版に依り、括弧内にページ数を示す。
2. 例えば、Earl G. Ingersollは、次のように述べてGallaherの「男娼性」を指摘している。“Like Corley of ‘Two Gallants,’ Gallaher has come close to admitting that he is willing to sell his sexuality to any woman able to pay his price.” (120)
3. Margot Norrisは、“the shocking denouement of the story is Gallaher’s inexplicable victory” (118) と述べているが、それは表面的な「勝利」に過ぎない。
4. 米本義孝は、この作品に触れて、「普遍性をもった広義のリアリズム文学として読むのならば、表面上は暗く重々しい作品でも面白く読めて笑いに誘われる場面に出あうことがある」(46) と述べて、次のように指摘しているが、これもまた一つの卓見である。「この物語の後半全体は暗い内容であるが、一語一句を押さえながらリアリズム読みをするならばユーモラスな場面に思えてくる。本人にとっては真面目で深刻なことでも、対象から客観的に距離をおいてみたり喜劇的な見地にたったりして読めば、仰々しい行為にみえ、滑稽にうつることもある。悲愴は滑稽の裏返しでもある。」(48) ただし、私見によれば、米本が「劇における前口上と解釈できる」(46) としている、コーレスの店でGallaherと再会するまでのChandlerの心理こそは、この作品における最も喜劇的部分だと思われる。
5. Ingersollは、Byronの詩を読む場面について次のように指摘している。“Chandler is reading one of his favorites, a ‘melancholy’ poem, written by another child—Byron was only fourteen at its composition.” (123)
6. この点については、拙稿を参照。「“Evelineの迷路”、あるいは迷路の中のEveline」、『沖縄大学人文学部紀要』第7号、2006。
7. この点については、次のように読むことも可能であろう。すなわち、現実感を喪失し、夢想到に耽溺するChandlerには、“Araby”の少年のように、物語の最後に“epiphany”が訪れることはない。“Araby”の結末は次のようになっている。“Gazing up into the darkness I saw myself as a creature driven and derided by vanity; and my eyes burned with anguish and anger.” (35) 少年は、バザーの虚飾の中に自らの愚かさを見、自らに対する「苦悶と怒り」に心が満ち溢れてくる。それは、確固たる覚醒であって、その後の少年の生き方を大きく変えたであろうと容易に想像しうる。しかし、そのような「覚醒」はついにChandlerには訪れない。彼は最後に「悔恨の涙」を流しはするが、それは自らを変革する契機とはなりえないからである。
8. Fritz Sennが指摘するように、ある種のこの謎解きはJoyceによって仕掛けられたものである。“This is all part of the game initiated by Joyce, who invites us to take things too far, however ‘too far’ is defined. There is also a suspicion that we may not venture far enough.” (104)
9. この作品の批評史の中で常に問題となってきた題名については、旧約聖書(列王紀略上、第18章44-45節)を持ち出すまでもなく、このようなChandlerとGallaherという二人の関係を要約した題名であると単純に考えることができるのではないだろうか。
10. ダブリンを脱出しなければ、芸術的な成功は望めないというJoyceの信念について疑問を持つであろう現代の読者に向けて、Giffordが次のように述べている。“The contemporary American reader may very well be baffled by Stephen Dedalus’s dramatic insistence (and Joyce’s personal insistence) on exile from Ireland as precondition for artistic enterprise.” (8)

引用文献

- Bozinelli, Roa M. Bollettieri and Modher Jr., Harold F. ed. *Rejoycing: New readings of "Dubliners"*. Lexington: UP of Kentucky, 1998.
- Dettmar, Kevin J. H. "The *Dubliners* Epiphany: (Mis) Reading the Book of Ourselves" In *Dubliners*. ed. Andrew Thacker, New York: Palgrave Macmillan, 2006.
- Gifford, Don. *Joyce Annotated: Notes for "Dubliners" and "A Portrait of the Artist as a Young Man"*. 2nd ed. Berkley: U of California P, 1982.
- Ingersoll, Earl G. *Engendered Trope in Joyce's "Dubliners"*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1996.
- Joyce, James. *Dubliners: Text and Criticism*, ed. Robert Scholes and A. Walton Litz. New York: Penguin, 1996.
- "The Evidence of the Letlers" In *Dubliners: Text and Criticism*. ed. Robert Scholes and A. Walton Litz. New York: Penguin, 1996.
- Joyce, Stanislaus. *My Brother's Keeper*. Cambridge, MA: Da Capo Press, 2003.
- Norris, Margot. *Suspicious Readings of Joyce's "Dubliners"*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2003.
- O'Brien, Edna. *James Joyce*. London: Phoenix, 2000.
- Riquelme, John Paul. "Metaphors in the Narration: 'Eveline'" In *James Joyce's "Dubliners"*. ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publisher, 1988.
- Senn, Fritz, "Clouded Friendship: A Note on 'A Little Cloud.'" In *A New & Complex Sensation: Essays on Joyce's "Dubliners"*. ed. Oona Frawly, Dublin: The Lilliput Press, 2004.
- 米本義孝, 「『ダブリンの人びと』再読(3)」. 『英語青年』11月号. 東京: 研究社, 2000.

A Prison Named Melancholy: A Study of Joyce's "A Little Cloud"

Hidetoshi KIMURA

Abstract

"A Little Cloud" is the fourteenth story in the fifteen stories of James Joyce's *Dubliners*, and he completed it early in 1906. This story has been argued by various critics, because it has wide possibility of interpretations like the other stories in *Dubliners*, and because it has "ambiguity," which excellent novels inevitably have, and which is said to be one of Joyce's artistic techniques. We must also note that Joyce himself said in his letter to his brother Stanislaus as follows: "a page of *A Little Cloud* gives me more pleasure all my verses." This remark is worth considering and gives us some clue to read this story, but we are not given any piece of the reason by the author. In this paper, I have examined this story through orthodox critical methods such as analyses of the psychology of the characters, especially of the protagonist, and of the relationship between the characters; besides that I have surmised the reason of the author's satisfaction with this story, based on some of his biographical facts. Through this process I may be somewhat successful in reading this story from a new angle and giving a slightly new interpretation.

Keywords: escape, melancholy, vulgarity, prisoner, exile, matrimony, caricature